デザイナーの彼にとってはお手のものだ。以来、Kさんは民謡の新たなルーツの焦点をグッと近年に絞り込み、一九五〇年代後半から一九六〇年代初頭に定めた。この時代の日本は、ブギやマンボ、ブーガルー、カリプソなど、ラテンのリズムにのせて歌謡曲を歌う〝リズム歌謡〟の全盛期だ。東京キューバン・ボーイズの演奏で民謡を歌う江利チエミもその文脈の上にあった。異国のリズムを取り入れて「ニューリズム」と称して打ち出していたのだが、このブームは日本に限ったことでもなかったらしい。

「一九五〇年代って世界的にラテンブームだったから、R&Bのアルバムでも一曲ぐらいは箸休め的に、ラテン調のおちゃらけソングが入っている。ニューオリンズR&Bの父といわれるデイヴ・バーソロミューの〝シュリンプ&ガンボ〟なんて、食べ物の曲なんだけど、すごく胡散臭くていいんですよ」

そもそもラテン好きになったのも、R&Bのレコードを漁っているうちにたどりついたということらしい。

「ニューオリンズって地理的にも歴史的にも人種が入り乱れていて、カリブのクレオールとか、テキサスやメキシコとか、いろんな文化や音楽が奇妙に入り混じっている。そういうごちゃ混ぜ感にすごく惹かれたんです」

まるでこの家の話を聞いているかのようだ。この家も〝古き良き〟アメリカを基調にして、そこに「占領」という歴史の暗い影を秘めながらも、あらゆる国のいかがわしい土産物とハリボテの電化製品が混在し、それらすべてが合わさった結果、強烈な個性を放っている。

憧れが本物を追い越せないにしても、ミイラ取りがミイラになるほどの勢いで憧れ続けた末に化けて〝如何モノ〟となったとき、それはもしかしたら本物を追い越す強度とパワーを持ち得るのではないか。この家を見ていると、そんな気がしてくる。

「良かれと思ってここで生活しているけど、ただ〝かっこいい〟って無邪気に思えているわけじゃない。こんなアメリカのお膝元に住んでいるのは象徴的で、いろんなことが数珠つなぎになっている。僕らは洋服を着て、西洋音階を口ずさむ。それは確かに変だけど、その不思議さが自分たちだし、たぶん不思議なまま死んでいくじゃないですか。だったらいったんそれを受け入れて、そこからしか前向きな答えって見つからない気がし